

平成二十四年度 推薦入試験問題（文学科 日本語日本文学専攻） 解答例

日本語日本文学専攻の小論文は、問一では文章を的確に読み取り要約する力を問い、問二ではそれをもとに多様な考えを論述する表現力を問うものである。よって、問二においては解答例に代えて出題の意図を示す。

問一（二〇点）

【解答のポイント】

- ・ 次の四点がしっかり押さえられていること。
- ・ 男性は漢字の多い文章を書く。
- ・ 節用禍と呼ぶほどあて字を多く使う。
- ・ 根拠のないあて字が強制された。
- ・ 文字をよく知る人と知らない人の意思疎通をはばむ。
- ・ 文章表現のきまりに基本的に則していること。

【解答例】

男性は漢字の多い文章を書く習慣がある。このような習慣は中世のころにはすでに広まっていて、多くのあて字が作られたのでこれを節用禍と名づけた。あて字は習慣的なものであって公式に決められたわけでもないのに、以前の教育ではその使用法を厳しく指導したため、あて字の漢字には意味がないことに気づかない人もいた。文字の読み書きができる人とできない人とが意思疎通するのをさまたげた。（一八四字）

問二（八〇点）

【出題の意図】

漢字は日本人にとって身近な存在であるが、もともとは外来の文字なので使用上不便に感じることもある。あて字を通して漢字の持つ矛盾を読み取り、さらに自分の経験を踏まえつつ、自分の感じたこと、考えたことを論理的に表現する力を問いたい。また、日本語に関する知識と表現力、日本語日本文学専攻において必要な古文の読解力をも問いたい。

【解答のポイント】

- ・ 筆者が述べている優越感と反発の内容をふまえ、それに対して自分の意見がはっきりと述べられていること。
- ・ 段落わけなど文章の構成がきちんとしていること。
- ・ 文章表現のきまりに基本的に則していること。